

# ホン トビ! から だそう



「ハリーポッター」より  
イギリスの鉄道 編

ユニバーサルスタジオジャパンの新しいアトラクションにスピノフ映画の公開と、完結してもなお話題のハリーポッターシリーズ。主人公である魔法使いの少年ハリーがホグワーツという魔法学校で人と関わり成長し、過去を知り敵に立ち向かう話です。私も夢中になり、学生時代には友人と呪文の言い合いをしました。いまだにふとした瞬間に呪文をつぶやくと答えてくれるものですから、人気の根強さを感じます。

作品の中でも好きなのが、移動のシーンです。暖炉や公衆電話を使ったり、トイレに流されたり、空飛ぶ自動車やドラゴンも。そして魔法使いといえばこれ！空飛ぶホウキもできます。そんな数々の移動手段のなかでも、もっともワクワクしたのが、シリーズ1作目「賢者の石」の駅の柱をすり抜けるシーンです。日常過ごしているところに入口があることで、私たちの生きているこの世界からもどこか別世界に行けるかもなんて考えてしまいます。ハリーポッターの舞台はイギリス、鉄道発祥の地でもあります。そこでイギリスの鉄道について調べてみました。



調べてみると初めての蒸気機関車が走ったのはイギリスです。産業革命の時代、商業のために開発された蒸気機関車により沢山の荷物を早く運ぶことが可能となりました。1861年にはロンドンで世界初の地下鉄が開通します。

日本の東京駅のようにロンドンのターミナル駅に「ロンドン」という駅名はついていません。地下鉄が無かった当時、重要な建物が多くあった都心に線路を引くわけにもいかず、少し外れたところに駅を設け、ターミナルとしたからだそうです。イギリスの各地方からロンドンのターミナル駅に向かって線路を引いたため、複数のターミナル駅ができることになりました。現在それぞれの駅は地下鉄で繋がっていますが、東京駅からこの地域にも行ける日本に比べると少し大変そうですね。また、日本ではあたりまえにある車内アナウンスは、イギリスにはありません。時刻表や風景を見ながら降りる駅を間違えないようにしなければいけないそうです。ハリーポッターの舞台になった駅はキングス・クロス駅です。ロンドンのターミナル駅の1つでスコットランドからの列車の終点です。現在は観光スポットになっており、壁をすり抜けるカートとハリーの使った路線の表示看板が掲げられています。イギリスに旅行をする機会があれば是非見に行きたいところです。



舞台を知ることによって物語により親しみを感じることが出来るのではないのでしょうか。普段の暮らしと異なる暮らしを知るきっかけにもなります。実際に現地に行き、登場人物の想いや見えていた景色を想像するのも楽しいかもしれません。魔法のホウキで空を飛ぶことはできなくても、列車などの乗り物で物語の舞台を旅することはできます。本を片手に列車の旅などいかがでしょうか。(岩崎)

参考資料一覧 \*鹿浜図書館にない資料もございます。足立区にありますので、ご予約ください。

#### 【人物数珠つなぎ】

- 『芥川龍之介』 関口安義/著 岩波新書
- 『年表作家読本芥川龍之介』 菅只雄/編 河出書房新社

#### 【まちの歴史探訪記】

- 『ブックレット足立風土記1千住地区』 足立区立郷土博物館
- 『芭蕉と足立』 足立区立郷土博物館

#### 【ホンからトビだそう】

- ハリーポッターシリーズ J.K.ローリング/作 松岡佑子/訳 講談社
- 『英国鉄道物語』 小池滋/著 晶文社

読んで頂きありがとうございます。  
ご意見や感想をお寄せください。  
今後の紙面づくりの参考にさせていただきます。

次号は

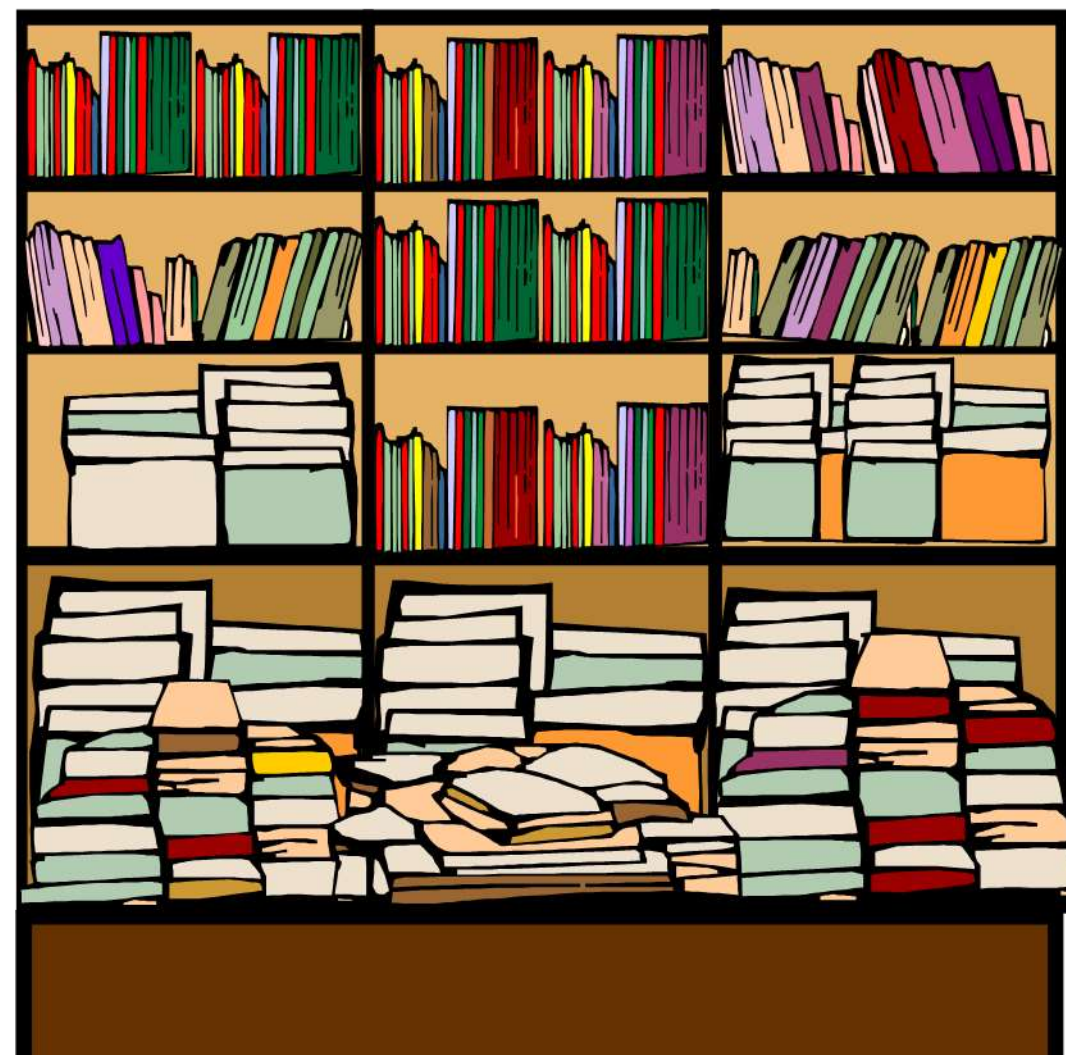
2016年8月発行予定  
(年2回発行です)

みんなの本棚  
予告号/vol2  
2016年1月31日発行  
発行: 鹿浜図書館  
TEL: 03-3857-6551

本からホンのちょっと広がる世界

# みんなの本棚

Vol. 2  
2016/Winter  
鹿浜図書館



## 連載記事

人物数珠つなぎ ● 芥川龍之介 編

まちの歴史探訪記 ● 足立と俳句を探る 編

ホンからトビだそう ● ハリーポッター 編

# 人物数珠つなぎ

## No. 3 芥川 龍之介 編

### ●人物数珠つなぎとは

「人物数珠つなぎ」では、ある人物について調べ、その生涯に関わりのあった意外な人物を探し、またその人物から次の人物を探すという、人のつながりを辿るコーナーです。

夏号は足立区出身の社会思想家である河合栄次郎を取り上げました。今号では、彼の中学・高校の後輩に当たる芥川龍之介を取り上げます。河合は芥川に本を譲る等の交流があったそうです。芥川には暗く厭世的なイメージを持っていましたが、調べてみると実は交友関係も広く友や師との深い繋がりがありました。そこで今回は人との繋がりにから表れている彼の明るさと思いやりある人柄についてみていきたいと思ひます。



芥川龍之介（1892～1927）

日本近代文学を代表する作家。代表作のひとつ『羅生門』は教科書に載る

遅し過ぎる実の父と文学好きの都会っ子 ～家族との繋がりに～

芥川龍之介は、明治25年の東京生まれで、生涯の殆どを東京で過ごしました。しかし、彼の実の父、敏三は山口県の生まれ。少年の頃に家出、維新の際には長州側として幕府軍と戦い、明治になってからは上京し牛乳販売業で成功するなど、息子の芥川のイメージとは似ても似つかない、激動の時代を遅しく生きた人物でした。芥川が人気作家になった後、父親が「自分からどうしてあのような子が生まれたのか」と周囲に語っていたという話も残っている程、正反対の性格の親子でした。では、芥川の文学への関心はどこからきたのでしょうか。それは、養家の芥川家の人々でした。生後間もなく芥川は母方の実家芥川家に預けられ、その後養子となります。芥川家は、生家とは正反対の文学好きな江戸の旧家でした。2歳の頃には養父母に連れられ歌舞伎を見に行っていたなど、幼い頃から文学や演芸が身近にある環境で育ち、その経験が後の文豪芥川龍之介を作り出したのかもしれない。

友情から生まれた芥川賞 ～友との繋がりに～

芥川は、デビュー後数年間は海軍機関学校で教師として働きながら小説を書いていた。その頃の写真が、関口安義著の『芥川龍之介』（※参考文献参照）の中に載っています。見ると髪も短くすっきりとして、爽やかな青年といった印象を受けます。当時の人気作家を紹介した記事の中にはこの頃の芥川の人となり書かれた記事もあり、初対面でもあつという間に打ち解ける笑顔の絶えない青年として紹介されています。若かりし頃の彼は、晩年の不眠症に苦しむ姿からは想像もつかない明るさと人懐っこさを併せ持っていました。そのため、大人になってからも学生時代の友の多くと、親交があります。特に高

校からの友人である菊池寛は、彼のデビュー作『鼻』を掲載した自費雑誌『新思潮』と一緒に出版した仲間の1人でもありました。芥川は、寛の訓読みから長男の名を比呂志と名付ける程の仲でした。芥川の死後、菊池は新進気鋭作家への文学賞として芥川賞を創設します。生前芥川の元には、毎週日曜の面会日に若手の作家が出入りし、文学談義や作品の添削の願いなど朝から人の訪れが絶えなかったそうです。現在の芥川賞の影響力を見ていると、死後も芥川賞を通して、彼が若い作家へ手を差し伸べているようにも見えませんか？

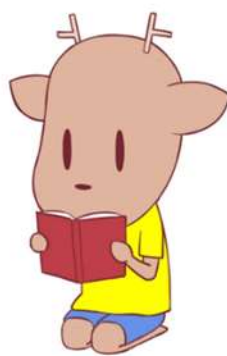
初めて認めてくれた人 夏目漱石 ～師との繋がりに～

そんな芥川自身は、漱石の談話会である木曜会に参加し、『鼻』という作品を漱石に激賞されたことから、注目の作家として一躍文壇に躍り出ることになりました。彼は自分を文壇へと導いてくれた夏目漱石を師として仰ぎ、「外の人にどんな悪口を云はれても先生（漱石）に褒められれば、それで満足だった。」と言い残している程でした。芥川が漱石に出会ったのは彼がまだ大学生の時、既に漱石は文壇の大御所であり、芥川からすれば、まさに雲の上の存在。そんな彼に作家としての能力を認められるのは、どれだけの自信となったことでしょう。また、漱石にとっても若い才能との出会いは、新鮮であったようで、「君等の若々しい青春の気が老人の僕を若返らせたのです。」「君方は新時代の作家になる積りでせう。僕も其積であなた方の将来を見てゐます。」と、期待に満ちた温かい手紙を数多く芥川に送っています。しかし、漱石は『鼻』を激賞してから1年と経たずに亡くなってしまいます。もしかしたら、自分の亡くなった後の文学界を託す、そんな気持ちを込めていたのかもしれない。

次回は、そんな芥川の師、夏目漱石について取り上げていきます。

# まちの歴史探訪記

## 足立区と俳人をさぐる編



### ●まちの歴史探訪記とは

「まちの歴史探訪記」では、鹿浜周辺から歴史を語るコーナーです。私たちが暮らす町の逸話や、身近なところから歴史にまつわるテーマを取り上げていきます。

今回はあだちと俳句のかかわりを探訪していききたいと思います。

### ●俳聖・松尾芭蕉

さて、みなさんは「松尾芭蕉」と聞いた時、どんなことを想像しますか？

私はやはり「おくのほそ道」です。中学校の国語の授業で、序文を暗唱したことを思い出しました。もちろん現代語と一緒に教わっていましたが、古めかしい言葉はどうにも頭に入らなくて、意味もろくに分からないまま「つきひははくたいのかかくにして…」と必死に繰り返したものです。かつての私にとっては、とにかく旅が好きなおじいちゃんだったのだなあ、という印象でした。

「旅」の出发点がここ、足立区だったとは露知らず。自分の暮らしている街が、かつてあの「おくのほそ道」の舞台であったのだと知り、とても驚きました。北千住にあった宿場町・千住。千住が「おくのほそ道」の矢立ての地（一番目の歌を詠んだ場所）ということは、「俳聖」と呼ばれる松尾芭蕉の最大の光跡の第一歩は、足立からはじまったということなのです。

千住は宿場町の中でも、江戸から隅田川を渡って船で移動することができたため、將軍家の移動の際にも利用されたほど重要で、また賑わう土地でした。多くの旅人が千住宿で江戸と別れ、千住で江戸に入ることに実感を得たとされています。「行く春や鳥啼き魚の目は泪」という芭蕉の句も、過ぎていく季節を惜しむ気持ちと共に、慣れ親しんだ人々と別れる悲しみを詠ったものでした。

鹿浜センターから徒歩十五分程の距離にある、西新井大師総持寺の境内にも、芭蕉が「おくのほそ道」で詠んだ「父母のしきりにこひし雉子の聲」という句の石碑があります。碑文によれば、「天保二年（一八四一年）芭蕉翁百五十回遠忌追福建」と、芭蕉の百五十回忌の際に建立したものです。足立区内にある芭蕉句碑の中では最古です。鳥がしきりに鳴いているのを聞いて、父母を恋しく思うという句の情景は、子供だけでなく大人になった今であるからこそ、身に迫るようなもの悲しさを感じます。二百年近くも前の人の句が、こうして身近な場所に残されているというのがとても感慨深く、またそうやって人の心に訴えかける力があるからこそ、こうして形に残されているのだと思います。

### ●足立と俳句

足立区と俳句の繋がりは、けて芭蕉だけではありません。例えば俳人・小林一茶が訪れた足立区六月の炎天寺は、彼が「蟬鳴くや六月村の炎天寺」などの名句を残したことで有名な寺院です。こちらでは初心者からベテランまで、若者男女を対象とした句会や教室がよく開かれています。特に「一茶まつり全国小中学生俳句大会」は、全国から毎年二十万句の応募があるほど大きな大会です。足立区俳句会連盟の主催する春秋の大会などと同様に、足立区を代表する俳句大会の一つと言えます。

ここ鹿浜でも、俳句・川柳サロンを毎月第一土曜日に開催しています。小学生から大人の方まで、お茶を飲みながら思い思いの句を詠んでいます。そこで集まった作品は句集にし、図書館で配布しておりますので、サロンに参加した方はもちろんのこと、俳句に興味のある方もぜひお手にとってみてください。

足立にゆかりのある俳人といえば、松尾芭蕉や小林一茶らの他に正岡子規、高浜虚子など、大変有名な人物ぞろい。みなさんも教科書などで一度は彼らの俳句・短歌を見たことがあるのではないのでしょうか。そんな大物たちが二百年ほど前、この足立で俳諧を嗜んでいたと思うと、なんだか特別な場所にいるような気分になりませんか？

俳句や和歌、短歌に詠まれた想いというものは、永い時を経て私たちの胸に訴えかけてきます。皆さんの「心に移りゆくよしなしこと」も、言葉にしてみませんか。あなたの何気ない一句が、誰かの心に届くかもしれません。